

1（２）多様な対象者のための学習講座

③麻織物のワークショップ

ー資料館の秋の特別展と連動してー

令和元年 10 月 11 日～11 月 24 日の 25 日間

体験講座：令和元年 10 月 19、20 日

於：砺波民具展示室研修室

○ワークショップ背景

他館、団体・組織と連携して新たな構想によって展示を企画した。ワークショップ形式の体験活動を取り入れ、体験を通して昔の暮らしや産業の進展を実感してほしい。また幅広い年齢層、特に若い世代に民具に親しむ機会を作り、魅力ある体験になってほしいと企画を進めた。

砺波の民具の実行委員会の中核館「砺波郷土資料館」では、秋の特別展「砺波地方の麻と出町の麻問屋神田商店」の開催した。古くから砺波地方では麻糸や麻織物が作られており、出町の神田家は幕末から明治にかけて麻問屋として開業し、砺波地方を牽引する一大産業になったことを紹介している。この展示と協働する形で砺波民具展示室で地機、高機など織物関連民具を観覧すると共に、地機を使った麻織物を作るワークショップを開催し、民具に親しむ機会とした。

○ワークショップ開催にむけて

1. 砺波郷土資料館・秋の特別展ポスターとチラシで周知。市広報・HPなどで周知する。
2. ワークショップ体験指導を Casa 小院瀬見（南砺市小院瀬見）に依頼する。使用する織機、麻糸なども Casa 小院瀬見で用意する。織機 1 台。作りやすいコースター状の布にする。
3. 詳細
 - ・開催日 令和元年 10 月 19 日（土）・20 日（日）
 - ・時 間 各回 1 時間（10 時、11 時、13 時、14 時、15 時開始の予定）
 - ・体験者数 合計 10 名
 - ・その他 体験者一人に指導者 1 名が付き、マンツーマンで作成指導するもの。

○「ワークショップ」写真



民具展示室入り口看板



機織り体験の様子①



機織り体験の様子②



機織り体験の様子③



仕上がったコースター2種

○作業

- ①ゴザを敷き、地機を組み立てる。
- ②経糸を地機に取付ける。このとき、経糸が絡まないよう、まっすぐに出るよう、間に画用紙を挟むのがコツ。
- ③体験者が地機に座ると、経糸を上げ下げする糸を足にくくりつけ、足を使った力加減で経糸が上下するようにする。
- ④経糸の端をベルトのようにしたものを、体験者の腹部にくくりつけ、固定する。
- ⑤緯糸を入れた飛び樋を準備する。
- ⑥織り始める。最初３段ほどは捨て糸を使う。その後は本糸で。緯糸を強くしないように注意しながら、長方形の形になるように心がける。
- ⑦織り終わったら、緯糸を長めにとり、織り終わりの箇所の後始末をする。
- ⑧出来上がり。

○受講者の感想

- ・体験の内容が大変おもしろい。こういった織物に興味があり、一度やってみたかった。
- ・整った長方形に織るのが思った以上に難しかった。
- ・昔の人は、大変だった。織るのは楽しいけど、ここまで準備するのは大変だったと思う。
- ・地機が大昔からあって、草からこんなふうに織物をつくっていたとは感激。
- ・苧をうむ作業はもっと難しくて体験するにはもっと技能も必要と聞いた。、女性の内職としてずっとされていのだが、女性の仕事には限りがなかったのだろう。

○評価と課題（主催者側の感想）

- ・受講者は全て女性で10人。年齢層は若い方から60代前半まで幅広く。（遠方からの応募もあったが、定員になっており残念ながら今後またこうした企画をするとお断りした。）
- ・郷土資料館本体の行事の一環として行うことで、広く機織り関係の民具について関心をもってもらう機会となった。また他の「砺波の生活・生産用具」についても関心が高まった。
- ・製作したコースターは各自お持ち帰りできる。こうした何かお土産があるということは参加者にとって嬉しいこと。
- ・麻織りの指導できる講師が少なく、機も1台しか準備できなかった。また織りの作業に慣れるだけでも2、30分かかり習得は難しかった。多くの方が時間前に来て、先の受講者の様子を見てから慣れた状態で体験してくださったが、それでも大変であった。
- ・幅広い年齢層が参加され、世代をつなぐというねらいは達成されたが、こうした企画を隔年など継続的な活動となるよう工夫する必要がある。